

# ご連絡

日中科学技术交流協会事務局

107

東京都港区赤坂四丁目三番三〇号  
横川ビル 日中協会内  
電話(〇三)五八五―八七一〇

## 日中科学技术交流協会

# 訪中代表団派遣を決定

### 第七回常任理事会

第七回常任理事会は十一月二七日(月)午後四時から六時二〇分まで東京青山日中経済協会会議室で行われ有山兼孝会長、越智勇一

茅誠司、橋口隆吉、野上茂吉郎常任理事、井上春成監事、小川智哉、相馬胤和幹事、田中脩二郎参与、漆戸敏事務局長が出席した。

## 議事

### 一、協会代表団訪中について

去る九月訪日の中国科学院代表団周培源团长から来年の適当な時期に協会代表団訪中の招待を受けたが、協会はこの招きに応じ来年四月末あるいは五月初めに代表団を派遣する代表団は協会役員と理学、工学、農学、医学の学会関係者約十五名で構成、中国では中国科学院、中国科学技术協会と全般的な話合

いを行ないまた各部門別に於いても打合せを行なう。

### 二、会長挨拶と年間業務打合せのため訪中団を派遣

来年は、日中科学技术交流がこれまでの最高になることが予期されているがこれをより効果的に行なうために協会は一月二日から十一日まで有山会長、小川、相馬、鈴木幹事、漆戸事務局長の五名を派遣することになった。業務打合せ訪中団は有山会長が中国科学院中国科学技术協会及び関係方面に挨拶回りをすると共に来年日本で開催される国際会議、シンポジウム、学協会総会に中国代表団が参加すること、中国で開催される国際会議、シンポジウム、学協会総会に日本の科学・技

術者が参加する問題、九月に協会役員と中国科学院代表団との間で協議された七項目の具体化について打合せ、また相方が必要とする事項について意見を交換する。

### 三、中国全国針灸、針麻酔学術討論会参加について

中国全国針灸、針麻酔学術討論会は中華医学学会、中医学会の共同主催で来年六月一日から五日まで北京市に於いて開催されるがこれに日本から九名の学者を招待したい旨当協会に連絡があった。

この討論会は中国の学者三百人、外国人学者及世界衛生組織から約七〇人の参加者によって行なわれるもので中国の針灸、針麻酔を総合的に外国の学者と共に討論する最初の試みて医学関係方面から大きな期待が寄せられている。

協会は九名の学者の招待を受入れると共に自費による希望者も参加出来るように中国医学学会、中医学会に問合せ中である。

### 四、日本学士院百周年祝賀行事

参加中国科学院代表団、ハルビン船舶大学代表団、国家地震局視察団の受入れ

「日本学士院百周年祝賀行事参加中国科学院代表团」

团长 陳宗基 中国科学院地球物理研究所

所責任者・教授・岩体力学

郝汀 中国科学院外事局長

姚佩君 中国科学院外事局幹部

一九七九年一月十三日来日、二七日帰国

「ハルビン船舶大学代表团」

一九七九年二月来日予定

「国家地震局地震工学訪日視察団」

团长 胡聿賢 中国科学院工程力学研究所教授

車俊儒 中国科学院工程力学研究所研究処長

劉穎 中国科学院工程力学研究所教授

王志勇 中国科学院工程力学研究所研究員補佐

一九七八年十一月二五日来日、十二月八日帰国

五、中国科学院代表团周培源团

長、秦力生副团长・中国宇宙航空学会参観団任新民団

長の講演集を發行

中国科学院代表团团长周培源氏の「中国科学院技術現代化」・副团长秦力生氏「中国科学院について」の講演は去る九月二七日約二五〇名の参加で日本学術会議講堂で行なわれ深い感銘を与えたが、各界からの要望によりその講演集を發行することになった。

また八月二五日経団連ホールに於いて経済団体連合会、日本航空宇宙工業会、日本航空宇宙学会、日中科学技術交流協会共催による中国宇宙航空学会参観団团长任新民中国宇宙航空学会理事長・中国空間技術研究院長「中国宇宙開発の現状と将来」の講演についても併せて發行する。

六、事務所移転

協会事務局は結成以来日中協会(茅誠司、岡崎嘉平太、門脇季光代表世話人、野田毅幹事長)のご好意により同協会内に設置させていたとき大変な便宜を受けていたが業務内容の拡大にともない来年一月四日から新事務所に移転する。

報告

一、日中學術センター

日中協会学術訪中団团长として訪中した茅常任理事から方毅副総理、廖承志中日友好協

会長、李昌、周培源、錢三強中国科学院副院長との会談及び日中學術センター茅提案に対する周培源氏の合意書簡の内容について詳細な説明がなされた。

二、会計報告

賛助会員加入の現況と今年四月一日から十月三十一日までの会計報告を行なった。

第三・第二回(第2・第3回)

第二・三回幹事会は十一月十七日、十二月二日、東京大学工学部相馬教授室で行なわれた。

幹事会は協会と中国科学院、中国科学技術協会、及び中国農林科学院・農学会、中国医学科学院・中華医学会との間の来年の交流について討議し、これを円滑に遂行するため来年一月訪中業務打合せを行なうことを決めた。

また訪中前日中科学技術協定締結や政府間の交流についての理解を深めるため及び各学協会の日中交流についての考えを聞くため科学技術庁、文部省、日本学術振興会や主な研究機関の責任者との懇談を予定し、理・工・農・医関係学協会には来年の日本で開かれる国際会議・シンポジウム、総会を問合せる。

## 日中學術交流センター茅構想と

## 周培源合意書簡(全文)

日中學術センターの構想 茅 誠 司

日中平和友好条約が締結されるに到った現在までの日中間の交流は、すべて民間の日中友好団体によって行われてきた。このような団体の数は、数十にのぼるようである。それは全国的なものや、また都道府県に限定されたものもある。これらの民間団体によって行われてきた各方面の交流は、二千年の永きに渉る日中間の絆を辛うじて継いできたものとして、高く評価されるべきである。

さて、平和友好条約が結ばれた後は、どのように交流が行われるようになるかについて考えてみると、次の三つの方法が考えられる。(一) 今までの民間の手によって行われてきた交流のほとんど全部を止めて、政府間

の協定に置きかえる。

(二) 今まで民間の手によって行われた交流を政府はますます奨励して、そのほとんど全部を民間の手に委ねる。

(三) 政府と民間双方が互に協調して、それぞれの分野を定めて交流を行う。

私は(一)と(二)の極端な方法を避けて、(三)によることが最も良いと考える。

その理由は、次の通りである。

政府の手によって行う場合は、国費によって予算が賄われるという安定性がある。しかしながら、交流の計画などは、一年半位前から確定して行うものと、突然行うものと二種類あり、とくに後者が非常に多い。つまり、政府予算は、安定性は高いが柔軟性に乏しいのである。このような意味から定常的な交流は、政府の手によって行い、同時に柔軟性を持った交流は、民間の手で行うことが良いと思う。

ところが、民間の一番の問題点は、資金難である。とくに、産業と異って學術方面に關係している民間の団体は、交流の資金を集めることに非常な困難がある。そこで、この困難を取り除くには、平和友好条約締結を記念して相当多額(一千億円)の金を日中學術交流基金として政府が支出し、この果実の使用を、ここに掲げた日中學術交流センターに委託することにしてはどうか、というのが私の提案である。

私は、八月二十九日、福田首相を訪問してその趣旨を説明した。首相は、よく検討する、とのことであった。

この基金は、日中双方に折半し、東京と北京に事務所を置き、この基金の運営と交流の業務を行うことにする。とくに、日中學術交

流会議を設けて、日中から双方同数の会議の委員を選んでその運営に当らせることにする。このセンターのことは、すでに新聞に報ぜられていたので、過日來日された中国科学院の訪日団の団長・周培源氏はこれに深い関心を持たれたが、筆者からその構想の概略をきかれて、賛意を表された。

中国は、いわゆる四人組の妨害によって、學術、とくに科学技術の現代化が相当遅れている。だが、四人組追放後は、農業、工業、科学技術、国防の現代化を二十世紀中に達成しようという四目標を立てて努力中であることは、周知の通りである。とりわけ、科学技術の進歩が先行すべきことは他の三つがそれを基盤とする関係上、最も重要視されねばならない。この意味から科学技術の現代化は、最も緊急を要する中国の課題である。しかしこの日中學術交流センターでは、科学技術としないで、人文・社会科学をも含めた學術としたのは、日本の過去の経験からいって、人文・社会科学と自然科学との均衡のとれた発達が必要であることを考慮したからである。

なお、ここに強調すべきことは、日中は常に対等の立場に立って相互補完的に交流することである。一時的には、學術の分野によって水準の違いがあるかも知れないが、その相違は十年を待たず解消されるに違いない。そ

して、相互が常に対等の立場に立って、両国のみならず世界の学術の進歩に貢献することが望まれる次第である。

### 周培源氏の合意書簡

茅誠司先生

先生を団長とする日中協会学術訪中団はこのたび我が国を訪問し私も中国科学院の指導者と親しく友好的で、かつすこぶる効果のある会談を行いました。先生が会談で提案された中日双方で学術交流委員会および学術交流センターを設立する案は、両国の学術交流と協力にとつて深遠な意義をもつものであります。

先生は御提案の中で次のようにのべておられます。

「歴史的な日中平和友好条約の調印と発効によって日中友好関係は新たな発展段階に入った。両国の友好関係をさらに強固にするために、両国の科学技術事業の充実と発展のために両国の科学技術関係者は相互補充の精神をもって、科学研究の交流を進めるために日中双方が日中(中日)学術交流委員会を設け東京と北京にそれぞれ日中(中日)学術交流センターを設置する」

私は中国科学院を代表し先生のこの御提案に同意いたします。

われわれはそれぞれ自国の学術界、関係方面に今回の会談の成果を報告いたします。

私は学術界、関係方面の賛同と支持がかならずえられ、両国の学術交流委員会と学術交流センターの設立が早期実現するものと確信いたします。

先生が中日両国学術交流と協力に大きな努力を払われたことに対し、われわれは心から敬意と感謝の意を表します。

中国科学院副院長 周培源  
一九七八年十一月九日

### 中国科学院科学技术视察团が来日

読売新聞社の招きて中国科学院技術视察団十名が十一月二五日来日しわが国の大学、研究機関工場等における研究教育状況の視察と研究、教育指導者との懇談を行っている。

十一月二七日夜読売新聞社は視察団の歓迎宴を行ったが協会から有山会長が招かれて出席した。

団長 馬大猷 中国科学院物理研究所副所長

副団長 張莫棠 中国科学院教育局責任者  
団員 銭志道 秦仲方 張耕野 楊士林  
汪仁樹 朱伯同 袁義谷 姚佩君

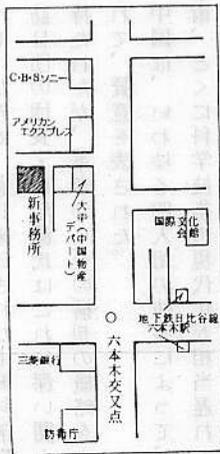
## お知らせ

一 入会金・会費の振込と領収書  
入会金・会費につきましてはなるべく銀行、郵便振込にてお願い申し上げます。  
なおお振込の場合は振込控を領収書にさせていただきます。(協会領収書が必要の方はどうぞご連絡下さい)

### 二 新事務所について

来年一月四日から左記の所に事務所を移転します。みなさまがお立寄り下さるようお願い申し上げます。

東京都港区六本木三ー一六ー二三  
タウンコート六本木三〇七  
電話 〇三(五八五)八七一〇 〒106



※ 仕事納め 十二月二十八日(木)  
仕事始め 一月四日(木)